手づくり市民メディア

あまいろだより

vol.48
2022.3.15

里山保育をみんなに

Action 今回、特集しました「東近江市の里山保育」に企業版ふるさと納税ができます。

詳しくはこちら　東近江市 HP

HP あまいろだよりの HP ができました！

あまいろだよりの最新号やバックナンバー掲載。編集でカットしたけどぜひ読んでほしいこぼれ話も随時アップします～。あまいろ探偵団手づくりミツロウラップのコーナーもあります。ぜひ一度アクセスしてみてください。

あまいろだより HP

＼ あまいろ探偵団の藤井朋子も編集者として関わっています ／

BOOKS 『産み方は生き方～自然なお産に願いを込めて』近日刊行予定！

東近江市で自然なお産に取り組んできた朝比奈助産師さんの活動を記録する本ができます。
（リーブル出版、1650 円（税込）、四六判 p201）
朝比奈さんの元で産んだお母さん達が企画･製作し、たくさんの家族の“産み方は生き方”ストーリーが詰まった一冊です！

詳しくは
特設サイトにて

NOW ON SALE 何度も洗ってつかえるエコラップ
ミツロウラップ 販売中 !!

Beeswax Wrap ミツロウラップ

オーガニックコットンの生地にミツロウ（たまぱん@信楽のニホンミツバチのミツロウ、オーガニックミツロウ）とオーガニックココナッツオイルと松ヤニをいい塩梅にブレンドして、あまいろ探偵団が手づくりしています。　（監修 Biwabochi ちまり）

▶取扱店　Base For Rest（東近江）、自家製酵母パンひとつぶ（能登川）、NPO 碧いびわ湖（安土）、自然食品と生活用品の店 hana（草津）、cafe あわいさ（信楽）

▶発送ご希望の方は、あまいろだより FB・インスタにメッセージにてお問い合わせください。（送料別途）

Sサイズ	13×13cm	（半分に切ったリンゴなどに）
Mサイズ	20×20cm	（.お皿に残ったおかずなどに）
Lサイズ	26×26cm	（サンドイッチやおにぎりなどに）
LLサイズ	28×40cm 、36×36cm	（キャベツ半分などに）

http://www.aoibiwako.org/amairo-channel/

あまいろだより（天色便り）第48号
特集／里山保育をみんなに
編集／あまいろ探偵団
（北岡七夏・志萱未来・中野和子・藤井朋子・森優子）
表紙タイトルロゴ／岸田知之
発行日／2022年3月15日
発行／特定非営利活動法人碧いびわ湖
～大切なことを他人まかせにしない。自分たちで力をあわせてつくる～
TEL 0748-46-4551　FAX -46-4550
Eメール info@aoibiwako.org
ブログ http://aoibiwako.shiga-saku.net/
びわ湖の森を元気にするkikitoペーパーを使用しています（びわ湖の森の間伐材活用）

里山保育をみんなに

タンポポの綿毛を飛ばしたり
カラスノエンドウの豆を数えたり
葉っぱにかくれた
テントウムシやバッタをつかまえたり
身近な自然のなか
「あっ！見つけた！」
キラキラかがやく子どもたちの目

里山保育の指導者の丸橋裕一さんと
「東近江さとやま Nannies（ナニーズ）」を立ち上げた
モリコーニ直美さんにお話を聞きました

プロフィール

丸橋裕一さん
滋賀県東近江市出身。
東近江市 市民環境部 環境政策課 里山活用推進室 室長。
保育士。
好きな食べ物はあんぱん。

モリコーニ直美さん
滋賀県大津市出身。
1994 年からイタリア、スペインに住み、2013 年から東近江市に移住。絵画教室アトリエ Gaia House を始め、任意団体地球ハートヴィレッジを運営中。
東近江さとやま Nannies 代表。
好きな食べ物は梅干しおにぎり。

東近江市の里山保育

市内の園児が、園の近くの身近な自然にふれ、自然の楽しさや大切さ、地域への愛着心を育むために、東近江市が行っている事業。

東近江さとやま Nannies（ナニーズ）

里山という身近な自然を通じ、子どもの成長を支えることを目標とした指導者の育成を担う。

あまいろ（以下あ） 丸橋さんが里山保育を始められたきっかけは何ですか？

丸橋裕一（以下丸） 里山保育は、僕が東近江市の環境学習施設「河辺いきものの森」で働いていた時に、子どもたちにもっと身近な自然の楽しさを知ってほしいと思ったことから始まっています。

公園　里山　森

丸橋裕一さん

丸　大学時代は森林のことを学んでたんですが、ある時滋賀に帰省して、改めて滋賀を見たときにすごくいいとこやなと思って。それから自然をどうしたら守れるかという観点で研究をしたことから、滋賀で市民が関わることで環境を保全していくということをしたいなと思って、学生の時に滋賀県内の役場に出向いて「このまちに公園を作るとしたらどんな公園がいいですか」って尋ねたことがあるんですよ。そしたら「そら、神戸にあるような噴水のある綺麗な公園を作りたい」って言わはったんです。あ、こういう感覚なんやと思って。田舎の良さというより、都市と同じ物が良いと思ってはるのが分かったんで、じゃあ都市の人が里山を活かした公園がいいって思ってくれはったらこっちも変わるやろうと単純に思ったんです。だから最初は、公園などをつくる大阪のコンサルタント会社に勤めました。そのうち東近江市内の河辺林を市民ボランティアで保全しようという活動が始まったのを知って、やっとこの辺の地域でも始まったなぁと思って、喜んで毎月一回のボランティアに行ってたんですよ。

あ　それは地域の方がされてた？

丸　そう、河辺林という平地の里山は珍しくて、それを保全したいと考えていた人たちが、自分たちでできることがあるはずと仲間を集めて森に入って、木が生い茂った暗い森の手入れをして豊かな森を作ろうって。だんだん仲間が増え、市も環境学習の場にしようと動いて、そこが今の「河辺いきものの森」（以下河辺の森）になったんです。職員の募集があったので、これこそやりたかったこと！と思って会社を辞めて試験を受けました。それから二十年、河辺の森の運営に携わりました。

でも、最初は子どもたちにどう接したらいいか分からへんし、自然の知識も乏しかったので、森に来る子どもたちから「この虫、何？」とか聞かれたらどうしよう、と思ってたんです。答えられへんとまずいなと。でも、何度も子どもたちと一緒に森を歩いているうちに、子どもって「答え」が聞きたいわけじゃなくて、自分が発見したことを伝えたいという気持ちの方が大きいんやっていうことに気付いたんです。「すごいの見つけたな！」って言ったら、喜んで次の発見をしに行く。子どもの「見つけた！」に対してちゃんと反応するっていうことをしたら子どもたちとの距離が近づいて、僕も子どもたちも楽しくなってきたんです。

そうしているうちにふと疑問が出てきたんです。東近江市にはこんなに自然があるのに、自然の中で遊んだ経験が少ない保護者や子どもが多くなってきていて、森の楽しみ方を教えてくれる河辺の森にたくさん人が来てる。このままでは里山とか田んぼのあぜ道みたいな身近な自然とのかかわりがなくなってしまうのでは？と。そこで、僕ら指導者が保育園とかに出向いていって、園の身近な所にある自然の楽しさを伝えたらみんなが自然の中で遊ぶ経験ができるのではないか、という発想から里山保育が始まってます。

里山保育をしませんか

丸　最初に里山保育の話をしに行った園の先生に「園の近くの自然のなかに、午前中の二時間、年間十回くらい五歳児を連れて行きたいと思ってるんやけど、どう思う？」って聞いたら「明日から行きたい！」って。

一同　笑

丸　さすがに明日は無理やけど、じゃあお試しでということで始めたのが二〇一四年度。そのときに子どもや園からの評判が良かったので、翌二〇一五年から本格的にスタートしました。

河辺の森は、長年手入れしてるから自然が豊かでどこでも何か注目できるものがあるんやけど、園のそばの自然はそうはいかないから、子どもたちが楽しめるかなと心配しながら行ったんですけど、子どもたちはカマキリの捕まえ方を教わるだけでも普段したことがないから、すごいくいついてきやった。ものの見方さえ教えてあげれば大丈夫やということが分かった。

ちょうどこの頃から園の統廃合で大規模園が増えてきました。三クラス八十人くらいの園やったらどうなるかということでやってみたんですが、ある園では周りに圃場整備された農地しかなかった。でもそこでやってみたら、子どもたちはいっぱい発見するんですよ。カラスノエンドウが生えてる所にはてんとう虫もいっぱいいて、アブラムシやカマキリもいるし、バッタも。そういう時期にちょっとものの見方を教えてあげたらいくらでも発見しはる。「アブラムシを食べてる！」とかね。大規模園で心配してたのは、人数です。里山保育のスタッフは二人やったんで、先頭に僕が立って、最後尾にもう一人いて、八十人を連れて歩くんです。（※保育士とボランティアも付き添っています）

あ　八十人！

丸　探検してると先頭の子と後ろの子で百メートル以上差が出るので、どうなるかなと思ったけど、これも全然問題ないのが分かった。というのはこの八十人、一列でずっと付いてくるわけじゃなくて、常に入れ替わってる。「テントウムシいたー！」って誰かが言ったら、「えーどこどこ？」ってわーって集まってきて、「カエルがいたー！」って言ったらわーってそっちへ行く。とにかく自分たちの興味関心に応じていっぱい小さいグループができて、それが絶えず入れ替わり立ち替わりしながら、八十人が縦横無尽に動いて探検しはる。

一同　笑

丸　大規模園でも山や森の無いところでも出来るっていうのが分かったから、もっと多くの園で里山保育を実施していきたいな、と。

子どもたちの眼を開く

丸　でも指導者二人では限界があって、どうしようかと思っていた時に偶然モリコーニさんと会って、指導者不足で拡大が難しいという話をしたら、モリコーニさんが「そんないいことしてるんやったら何かお手伝いしたい」と言ってくれて、間もなく「里山保育をすべての園児へ贈りたい」というキャッチフレーズのもと「東近江さとやまNannies（ナニーズ）」という里山保育の指導者を育成するための団体を立ち上げてくれました。固定メンバーに里山保育の技術を伝えていくことができたら、里山保育を拡大できるし継続もできる。

モリコーニ直美（以下モ） 里山保育を研修させてもらってきて、丸橋さんが何気なく子どもらに言わはる一言って深い知識や経験から出てきているっていうことを実感しました。

モリコーニ直美さん

あ　印象に残ってる場面はありますか？

モ　そうですね、毎回探検に行く前に丸橋さんが室内でスライドを見せて子どもたちに色んな生き物とか植物を紹介されるんだけど、「今日はこんなちっちゃな木の実を探しに行こう」って、ペンの先と比較した小さな木の種の写真が出てきて、「なんやろ？」って、子どもたちも見るんだけど、このちっちゃい種の中にこんな大きい木が育つための地図が入ってるっていう話をされながら、今日の探検場所に生えている樹齢何百年っていう大きなケヤキの写真が出てきて、こんなちっちゃなタネが、こんなに大きな樹になるんやでっていうことをさりげなく伝えはるんですよ。子どもたちの「すごい！」っていう気持ちが喚起されて、それで子どもたちは探そうっていう気持ちになるんです。それを『子どもたちの眼を開く』って仰るんだけど、難しい話もすごく簡単にさらさら表現していかはる。

丸　何か子どもが興味を持つような物はないかな、という目で自然を見るので、僕にも新しい発見がいっぱいあって、その発見を子どもたちに伝えたいな、という発想でプログラムを作ります。たとえば、「穴あき落ち葉を見つけよう」。最初にスライドを使って穴のあいてない落ち葉の写真を見せて「これ落ち葉やな」と。次に、ものすごいちっちゃい穴があいてる落ち葉の写真を見せて「これ穴があいてるな、何で穴あいてるん？」って子どもたちに聞くと、「虫が食べたからや」って言いやる。「じゃあこれは？」って、次はもっと穴だらけの落ち葉の写真を見せる。「いっぱい食べたんやな、きっと美味しかったんやな」。そしてもっと穴あきのやつを見せる。「これなんかむちゃくちゃ美味しかったんやな」って話をする。その後で、穴あきの落ち葉を見つけようって言って探検を始めると、「こっちよりこっちの葉っぱの方が人気なんや」とか、ストーリーを子どもらが勝手に見出しやる。それまで見向きもしなかったものが、じっくり見る対象に変わるんです。

自然がある豊かさ

里山保育のたんけんカード

あ　モリコーニさんはなぜこの活動をしようと？自然との原体験のようなものはありますか？

モ　幼稚園の時に、川をのぞいてカエルが泳いでたり、たんぽぽが咲いてるところで花を摘んだりしてたことは、大事な思い出になってて、そういう思い出があったことで小学校で友だちと仲違いして一人になった時にすごい助けになったと思います。ひとりぼっちやけど自然があったらひとりじゃなくて。それって大人になっても変わってなくて。ある時期、イタリアのサルディーニャ島に住んでたことがあって、そこは一歩家の外に出たら、岩がゴツゴツある間に生したラベンダーとかサボテンとかユーカリの木とか樫の木とかわぁと生えてて、オリーブ林があって。ハリネズミがいたり、野うさぎが跳ねてたり、ロバが出てきたり。自然の中にいるって自然の楽しさを共有できる時間を作覚ないと、と思ってたんです。だから んで橋さんに声かけてもらって、すぐ「やってみたい！」って。

里山保育は限られた時間のなかで制約もあるけど、親の自然への関心の有無に左右されることなく裾野を広げるということを主眼にしていて、子どもたちの自然への関心が広がるように自然の楽しさを伝えたいというスタンスで始めています。

最後にこれからの目標は何でしょう？

丸　二〇一五年に一園から始めた里山保育を、少しずつ増やし、今九園で実施しています。これをもっと増やしていくことが当面の目標ですが、いずれ市内全園に広げ、市内の在園五歳児全員が、身近な自然の楽しさを知っているという共通の基盤を持つようになってくれることが夢です。

自分たちの地域に里山保育を根付かせていこうという市民が増えていったら、きっと継続しやすいんじゃないかなって思います。里山保全に取り組んで「手入れした森に子どもに来てほしいけどどうしたらいい？」って聞かれてきてくれるようなおじいちゃんおばあちゃんと、「子どもを自然の中で遊ばせたいんやけどどうしたらいいのかわからへん」っていうお母さんたちがつながるような役割をナニーズが担っていって、里山保育を連携していけたらもっといい形に社会が変わっていくんじゃないかなと思います。

暮らしのコラム

森と、こどもへのまなざし

立石　しほ

こども 2 人が『せた♪森のようちえん』に通う。
珈琲と焼き菓子 たでくうむし を主宰。

次男がこの三月、せた♪森のようちえんを「卒森」します。長男に引き続き、せた森に通うこと５年。最初は正直、「自然」という要素に惹かれたことが大きかったけれど、大事なとこってそこだけじゃないって教えてもらいました。

大雨の日、分厚い氷が張るほど寒い日、風が全くない蒸し暑い日…。毎日表情を変える自然は、自分たちの思い通りになるわけもなくて、心だっておんなじで、ととのう日も、ととのわない日もあって。朝９時、おはようと言って集い、「元気たっぷり」、「元気ちょっぴり」、「今日は〇〇やねん」とか報告して。

せた森は、子どもが主役。その日のすることだって、ほとんど子どもが決めます。行きたいところ、やりたいこと、でもそれだと無理がある、じゃあどうするといい？自分たちで考えて、相談して、決めて、やる、日々。

ただ子どもと自然の中に行っただけで、こんな積み重ねができるわけじゃあもちろんなくて、自然保育は、子ども同士の世界を守る”大人のまなざし”があってこそ。大人主導ではなく、その子があるがままであること、その子の“今”に寄り添い支えることを、とても丁寧に、大切にしてくれる。そんなまなざしのある森だからこそ、子どもたちは安心して過ごし、時に自分と、相手と、自然と向き合うことができてるんだなぁ。本当に大切で、尊くて、ありがたい日々でした。

…まあ、そう言いつつも私自身は、家に帰れば手放せないことばかりでめっちゃ鬼モード。頭ではわかっているけれど…。そんな私も森に入れば、自分はただの自分で、それ以上でもそれ以下でもないとか、人間も自然の一部って肌で感じて、肚にすとんときたりして、その一瞬、こだわってることなんかから解放されたりするのです。

森の中、花や、石や、水や、虫に目を輝かせ走り回って、子どものこころとからだが解放された時、彼らはこんなにも輝いていて、子どもが自分の力で育っていく、その日々がまるごと「育ち」なんだと感じます。

私がしているのはせいぜい日々のお世話くらい。でも、そんなせた森に学んだ”まなざし”の置き方が、私の心にはしっくり、きています。